

周辺からの記憶 43

2021 年度シンポジウム

「被災と復興の証人 11 年の足跡とこれから」

村本邦子(立命館大学)

4 月 21 日、十三にあるシアターセブンに、母子避難をテーマにしたドキュメンタリー『決断』を観に行った。いつも ZOOM の研究会で一緒にいる森松明希子さんも映画に登場し、舞台トークがあるということで、リアルで会えるのを楽しみにしていた。とても良い映画だった。キッパリと命を最優先することを選んだ女たちの成長の物語でもある。状況を変えるためには自ら動かなければならない。結果はどうあれ、選挙に出たり裁判に立ったりしながら、声を上げ、大きな流れに抗う人々の軌跡を残すことで次世代への責任を果たそうとしておられた。きちんと情報提示されたなかで 1 人 1 人が総合的に判断すれば当然さまざまな選択があるだろう。正しい判断、間違った判断があるわけではない。ただし、前提となる情報は自ら求めていかなければならない世の中だ。いつ誰の身にも降りかかり得ることとして多くの人に観て欲しいし、自分自身のあり方を突き付けられる。

そして、驚いたことに、森松さんと一緒に登壇したもう 1 人の女性は、なんと 2014 年に東日本家族応援プロジェクトで講師にお招きしたことのある川崎あやこさんだった（周辺からの記憶 17「2014 年福島のこと」158 頁参照）。当時、夫の理解を得られないまま母子避難し、長男が新しい学校に馴染めず戻ってしまったという苦しい胸の内を語ってくれた。「子どもが病気の場合は、その子のために家族が団結できるが、災害の場合は、家族だけで家族を守れない。社会を変えなければと思うようになった」とおっしゃっていたが、現在は母子避難京都原告になっているとのこと、とても凛々しかった。素晴らしい女性たちの存在は誇らしく、とてもエンパワーされた。

長く続けていくと、いろいろなことがつながっていく。



最終年度のシンポジウム

被災と復興の証人 11年の足跡とこれから

毎年、東北4県を訪れ、現地の人々と顔の見える関係を結び、その声に耳を傾け、被災と復興の証人になろうと東日本・家族応援プロジェクトを立ち上げた。当初、十年プロジェクトとしてスタートしたが、最終年度となる2020年、コロナ禍のためにオンラインでのプロジェクトとなり、最終年度を2021年度にした。結果として11年、それぞれの土地の豊かさとともに、被災がもたらした影響、それを生き抜く人々の知恵と力について多くを教わってきた。最終年度のまとめとしてのシンポジウムでは、プロジェクトに関わりのあった人々が集い、それぞれの立場からその足跡を確認し、あらたな出会いと次の一歩が生まれることを願って「被災と復興の証人 11年の足跡とこれから」を企画した。

第一部 11年目の証人たち

第一部では「11年目の証人たち」として、今年度、プロジェクトに参加した院生たちの報告から始まった。まずは、むつチームで

むつチーム

この地域は他の地域と比べると震災と関連付けられることが少ない地域になっているが、地震、津波の影響を受けた被災、またあまりよく知られていないが、下北半島には原発関連施設がたくさんあり、原発事故の影響も受けている。8月のプロジェクトはリモートで行い、10月にフィールドワークを行った。

リモートのプロジェクトでは3つのイベントを行ったが、院生も参加した「支援者支援座談会」について報告する。これは、これまでむつの地域のさまざまな支援者が集まって行ってきた支援者支援セミナーの成果を振り返る形のものだった。

ひとつめに印象に残っているのは、むつ児相の真手さんが何度も語られていた「関係者主体から家族主体へ」ということである。関係者、いわゆる専門家や専門機関が家族の問題を解決するのではなく、また、専門家や専門機関が単独で動くのではなく、家族に関心を持って理解し、地域全体で家族を支えていくということを意味している。家族主体の支援を阻むような組織や専門家の縦割りに横串を刺すきっかけになっていた。立命館とむつの二人三脚で蓄積されてきた10年の経験がこのような「理論」として結実する瞬間に、私たち院生も立ち会わせてもらったような気がした。

もうひとつ大きな学びとなったのは、続けることの意味である。村本先生の「十年やるよ」という約束で始まったプロジェクト。「やること」ではなく「つづけること」が先にあることで、さまざまな課題とその解決策を共に探る協働関係がつくられていった。

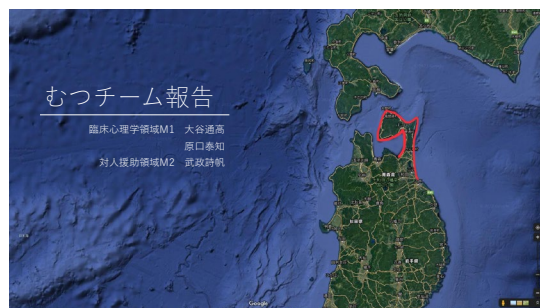


また、「非日常」も続けることで「日常」となる。行政の中では特異的とも言える多職種連携の場も、繰り返されることで受け入れられていった。それから、「出会い」が重なり「繋がり」となるということ。立場の異なる人々が、年々顔見知りになり、信頼関係が深まっていった。震災直後になされた不確実な状況下での「十年続ける」という宣言、「十年続けてきた」経験の分かち合い、続けてきたことを「これからも続けていく」という決意が成されたということ、それを見届ける場に私たちがいるという事実への深い驚きがあった。

最後にフィールドワークについて簡単に報告する。10月15日から3日間、むつ児相の杉浦さんご夫妻にキャンピングカーで案内頂く形で、1日目には、①七戸十和田駅(集合場所)②六ヶ所原燃PRセンター

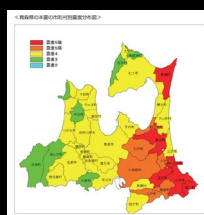
(六ヶ所村)/③尻屋崎/④むつ来さまい館(むつ市)、2日目には、①恐山/②川内ダム/③三上幸太郎記念館/④あさこハウス/⑤大間崎/⑥北通り総合文化センターウイング/⑦八戸みろく横丁、3日目には、①館鼻朝市/②みなと体験学習館/③蕪嶋神社/④三陸復興⑤国立公園/⑥是川縄文館を訪れた。

そこで見たものをあえて一言で言うなら、下北半島の豊かな文化と自然、それに対する無表情な人工物、つまり下北半島が抱える軍事施設や原発関連施設だった。これは大きな矛盾として私たちの前に立ちはだかった。そんな矛盾のなかをたくましく生きていかれるむつの人たちの姿に知恵と大きな力を得た。プロジェクトは一区切りとなるが、ここで得たものを繰り返し語り継ぐことで、この知恵を紡いでいこうと思う。



下北半島・むつ市(青森県)と東日本大震災

東日本大震災の影響：被災概要（青森県）



- ・最大震度：5 強
- ・死者：3名・行方不明者：1名（いずれも津波の影響）
- ・避難者：最大24,132人（停電・津波の影響）
- ・被害総額：1846億円（宮城、岩手、福島、茨城に次ぐ全国5番目）

東日本大震災の影響：原発事故との関連



- 地震による直接的影響
- ・東通原発・六ヶ所再処理工場での電源遮断
- 福島第一原発事故による影響
- ・福島県からの避難者の受け入れ/自衛隊の派遣
- ・観光・生産物への風評被害
- ・大間原発の建設凍結 等

プロジェクトの紹介

リモート：8月27日・28日

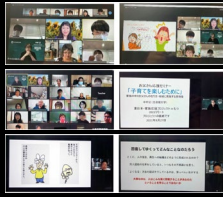
「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021@リモート」

8月27日

- ・ 支援者支援セミナー座談会 (14:30～16:00)
「家族の支えを支えるむつの力」
～東日本家族応援プロジェクトの10年とこれからを語る～
- ・ お父さん応援セミナー (18:30～20:00)
講師：中村正先生
「家族の中のお父さんのあり方や地域に貢献する男性像について考えるセミナー」

8月28日

- ・ 団士郎講演トーク (10:30～12:00)
「家族の小さな物語を通して、活動最前線の今の気持ちを話す」



下北半島フィールドワーク

10月15日(金) 1日目
①七戸十和田駅(集合場所)②穴ヶ所
産婦人センター(六分所村)/③氏
庭崎/④むつ赤さまい協(むつ市)

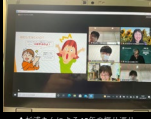
10月16日(土) 2日目
①忍山/②川内ダム/③三上幸太郎記
念館/④あさこハウス/⑤大間崎/⑥
北通り総合文化センターウイング/
⑦八戸みらく横丁

10月17日(日) 3日目
①雄勝町市/②みなと体験学習館/③
南崎神社/④三陸復興国立公園/⑤
豊川崎文庫



支援者支援セミナー座談会

- ・ 例年むつで行われていた、地域のさまざまな対人援助による事例検討の場、『支援者支援セミナー』の成果を振り返り、今後に向けた展望を話し合う。
- ・ むつ市児童相談所から、杉浦さん(現在はご退職)、真手課長、板庭さん、立命館から村本邦子先生、中村正先生が参加。





▲杉浦さんによる10年の振り返り ▲むつ市長からのメッセージ ▲今後への期待が込められた座談会




下北半島の豊かな文化と自然、対する 無表情な人工物。



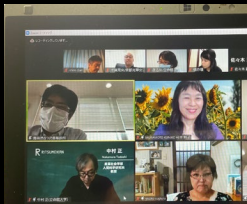
- ・ 関係者=専門家による家族の「問題」解決
- ・ 専門家・専門機関による単独行動

↓

- ・ 「家族全体」に興味を持ち、理解する
- ・ 地域の力を引出し、地域全体で家族を支える

- ・ 「地域全体での家族主体の支援」を限る縦割りに、横串を刺す「さっかけ」としての『支援者支援セミナー』

立命館とむつの二人三脚で蓄積されてきた10年の経験がこのような「契機」として結実する瞬間に、私たち関係者も立ち会わせてもらったような気がした。



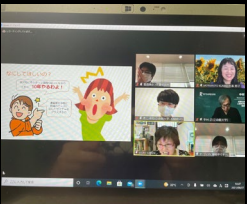

11年の歩みの末に出会った、人々の力、土地の力。

座談会での学び：

「つづけること」：“約束”がひらく対人援助

- ・ 「やること」ではなく、「つづけること」
・ さまざまな課題とその解決策を共に探る協働関係がつけられていった
- ・ 「非日常」も続けることで「日常」となる
・ 特異的だった多職種連携の場も、繰り返されることで受け入れられていった
- ・ 「出会い」が重なり「繋がり」となる
・ 立場の異なる人々が、年々顔見知りになり、信頼関係が深まっていった

震災直後になされた「10年続ける」という宣言、「10年経てばまた」経験の力がある、続けできたことを「これからも続けていく」という決意、それを見届ける場に私たちがいるという事実への驚き



多賀城千ーム

宮城県、多賀城市の概要はスライドの通り。宮城県公式HPによれば、推定人口は約6万4千人減少しているとのこと。多賀城市は奈良時代に東北地方を統治するための役所「多賀城」が置かれて、政治・文化・軍事の中心地としての役割を果たした歴史ある町で、文化財が豊富にある。東日本大震災では高い津波によって町の34%が浸水し、十年間の復興計画が策定された。現地での再建を基本とし、さまざまな対策が講じられ、多重防御を行うことで、

プロジェクトの紹介

▷フィールドワーク：10月15日～17日

仮に同規模の津波がきても、市内の居住可能地域の津波の浸水深を2m未満に抑えるように設計された。2メートルを越えると建物が大幅に流出し、死亡率が高くなると報告されたからだ。

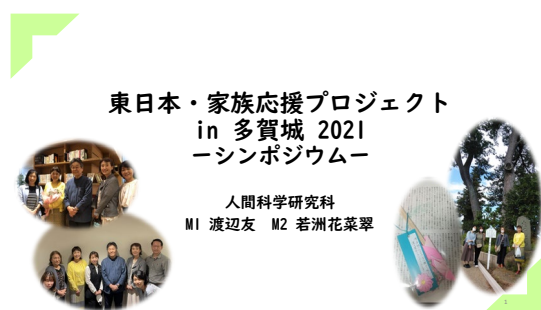
現地でのプロジェクトはスライドのようなスケジュールで行われた。多賀城市立図書館でのイベントは、多賀城民話の会の方の民話語り、おおぞら保育園の歌や遊び、午後は団士郎先生の漫画トークが行われた。東北弁が優しく響く空間で、民話に耳を傾ける時間歌や手遊びを活き活きと楽しむ子供と、温かく見守る大人の姿が印象的だった。

夜は上山先生、モリス先生のお宅を訪問し、おいしい豚汁を頂きながら、被災当時の多賀城の様子や防災の備えについてのお話を伺った。多賀城にも川伝いに黒い津波が押し寄せ、多くの方が亡くなられた。臨床心理士である上山先生は被災者でありながらも、支援に関わられた。被災時、支援者が他者を支援するためには、日頃から家を片付け備えておく必要があるとのこと、支援者としても強い覚悟を感じた。

翌日は、震災遺構である仙台市立荒浜小学校を訪れた。荒浜小学校は海岸から700mに位置しており、地震が起きた70分後に、2階まで(高さ4.6m)津波が、押し寄せた。津波の圧力で曲がった2階の金属フェンスを見て、体で津波の恐ろしさを感じた。小学校周辺には集落が広がっていたが、災害危険区域に指定されたため集団移転がなされたため、荒浜小学校がポツンと建っていた。

次に復興を支える民話活動について報告する。1970年代より民話を採集し残そうとする活動がみやぎ民話の会を中心に始まった。民話は、人々が「生き抜いてきた激しい現実」に根がある。震災体験を語り聞く活動や、町民の被災証言をまとめた本の出版を行われてきた。本プロジェクトには、2014年より協力をして頂いている。今年はみやぎ民話の会の小野和子さん、加藤恵子さん、島津信子さん、目黒とみ子さんの4名の方と対談させてもらった。ある人に物語を語ってもらい、聴き、残すことは、民話、歴史の継承であり、その人が生きてきた現実立ち会う、大切にすることだった。

プロジェクトの学びについて報告する。まずは、同じ熱量で継続することの大切さである。たくさんの現地の方にプロジェクトが受け入れられ、今後も繋がりたいと思ってくださるのもそのゆえだと感じた。また、2年続けて参加したことで、少しずつ1つ1つのものが繋がっていく中で自分事として考えられることが増える感覚があり、プロジェクトに関わり続けている方には見えているものがまだ見えていないなあと感じたのである。



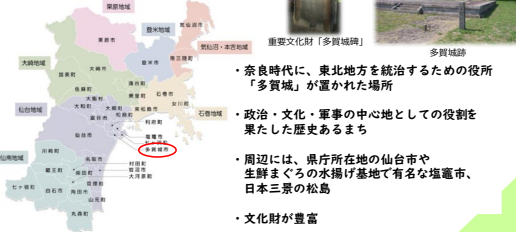
宮城県の概要



推定人口：2,282,142人（令和3年8月1日現在）
面積：7,282.29km²（令和3年4月1日現在）
県庁所在地：仙台市
観光：



多賀城の概要



多賀城市立図書館でのイベント

団先生の漫画トーク

「Doors」
単身赴任で週末のみ家に帰るお父さんが、子どもが部屋に引きこもって出てこない相談に来る。家をリフォームしてみてもいいという提案を聞いて、子供部屋の扉を外して子どもと一緒にドアを捨てに行くお話。



「3 on 3」
不登校の中学生の息子の相談に来た両親に、生活のパターンを変えるように提案して、父は息子と毎週ドライブに行くようになる。息子は街のバスケットでプレイするようになり、学校を転校する。

実は同じ家族の物語。提案を聞くこと、状況を変えてみるための行動を起こすことが大切。

災害と向き合う（人の力）



美味しい豚汁を頂きながら



【上山先生とモリス先生のお宅訪問】
・被災当時の多賀城の様子、防災の備えについてお話を伺う。
・多賀城にも川沿いに黒い津波が押し寄せた。
・被災時、支援者が他者を支援するためには、日頃から家を片付け備えておく必要がある。

多賀城市の震災復興計画



災害と向き合う（モノの力）



↓荒浜小学校



海岸線沿いに建設された防潮堤

【震災遺構 仙台市立荒浜小学校】
・海岸から700mに位置しており、地震が起きた70分後に、2階まで(高さ4.6m)津波が、押し寄せた。
・津波の圧力で曲がった2階の金属フェンスを見て、体で津波の恐ろしさを感じた。

プロジェクトのスケジュール

10月1日(金)	10月2日(土)	10月3日(日)
15:00~16:30 都市型津波を学ぶ 3.11震災語り部ツアー →台風接近のため中止に...	10:00~11:30 ワークショップ ①「うたとおはなしと伝承遊びをたのしもう」 ②「絵本とペーパーアート」 ③「お芋玉のうたと遊び」 14:00~15:30 団士の漫画トーク 18:00頃~ 上山先生、モリス先生のお宅訪問	9:30~10:20 震災遺構 仙台市立荒浜小学校 13:00~15:00 民話 声の図書館 宮城民話の会さまとのプログラム

復興を支える民話の力

・1970年代より民話を採取し残そうとする活動が始まった。
・民話は、人々が「生き抜いてきた激しい現実」に根がある。

・震災体験を語り聞く活動や、町民の被災証言をまとめた本の出版を行われてきた。

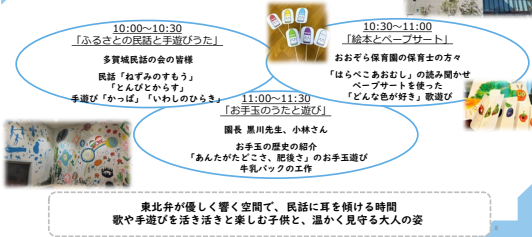
・本プロジェクトには、2014年より協力をして頂いている。

・今年はみやぎ民話の会、小野和子さん、加藤恵子さん、島津信子さん、目黒とみ子さんと対談。

・ある人に物語を語ってもらい、聴き、残すこと
→民話・歴史・継承
その人が生きてきた現実と立ち会う・大切に



多賀城市立図書館でのイベント



プロジェクトとしての学び

◎「同じ熱量で継続すること」の大切さ

言葉の重みと人を惹きつける力に変わる

↓
たくさんの方の現地にプロジェクトが受け入れられ、今後も繋がりたいと思うてくださる

◎オンラインの去年と現地での本年

自身の変化

2年間参加し少しずつ1つ1つのものが繋がっていく中で、自分事として考えられることが増える感覚

◎プロジェクトに関わり続けている方には見えているものがまだ見えていないあと感じる感覚



参考文献

宮城県公式ウェブサイト「宮城県推定人口（月報）」（最終閲覧日2021年8月31日）
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/toukei/suiketop.html>

国土交通省国土地理院「令和3年 全国都道府県市区町村別面積調（4月1日時点）」（最終閲覧日2021年8月31日）
https://www.ssi.go.jp/KOKU_YOHO/MENCHO/bocknumber/G00nseki20210401.pdf

多賀城市ホームページ「市の規模」（最終閲覧日2021年9月1日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/koho/shise/gaiyo/profile/titotitikei.html>

多賀城市ホームページ「多賀城市／市長室へようこそ！」（最終閲覧日2021年9月2日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/hisho/shise/gaiyo/yokoso/index.html>

多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財／特別史跡多賀城跡附寺跡」（最終閲覧日2021年9月9日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/terato.html>

塩竈市ホームページ「まぐろのはなしあれこれ」（最終閲覧日2021年9月9日）
<https://www.city.shiogama.miyagi.jp/sashiki/15/1960.html>

多賀城市における東日本大震災の被害状況概要（平成0年8月1日更新）（最終閲覧日2022年1月23日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bosai/kurashi/daiishinai/documents/h3008higaigaiyou.pdf>

参考文献

たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復興計画」（最終閲覧日2022年1月24日）
<http://togajo.1rides.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E3A79E83838E838E838E838E838E793438B>

引用写真

じゃらんnet「宮城のご当地グルメメニューランキング TOP10」（最終閲覧日2021年8月31日）
<https://www.jalan.net/gourmet/040000/mnu/?screenId=00W170&infIusKbn=0>

じゃらんnet「宮城のお土産ランキング TOP10」（最終閲覧日2021年8月31日）
<https://www.jalan.net/onlyage/040000/?screenId=00W170&>

楽天トラベル「宮城観光2021！デートや雨の日におすすめのスポットも」（最終閲覧日2021年8月31日）
<https://travel.rakuten.co.jp/mytrip/rankings/spot/miyagi/>

宮城県公式ウェブサイト「宮城県地域マップ」（最終閲覧日2021年9月1日）
<https://www.pref.miyagi.jp/site/access/ken.html>

多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財／特別史跡多賀城跡附寺跡」（最終閲覧日2021年9月1日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/terato.html>

多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財／重要文化財「多賀城碑」（たがじょうひ）」（最終閲覧日2021年9月13日）
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/togajohi.html>

引用写真

たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復興計画」（最終閲覧日2022年1月24日）
<http://togajo.1rides.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E3A79E83838E838E838E838E838E793438B>

朝日新聞デジタル「世界で雨目の「はらぺこおむし」 家は日本で製作」（2021年5月27日）
<https://www.asahi.com/articles/ASPSWA00DP5MUTFL005.html>（最終閲覧日2021年10月14日）

minne「どんな色が好き？ペーパーサート」（最終閲覧日2021年10月14日）
<https://minne.com/items/2158315A>

3d4つ11にもわすれないためにセンターしゃしんときじ「多賀城市町観丁目の道路の様子（2011年4月）」（最終閲覧日2022年2月4日）
<https://recorder311.smt.jp/blog/46186/>

宮城県復興支援 伝承課「みやぎ・復興の歩み⑩」3-4 東日本大震災の概況（最終閲覧日2022年2月4日）
<https://www.fukukoniyoai.jp/woradress/wmontent/uploads/2021/03/2fe594387c76ccee2387ee924b040b4ee.pdf>

引用写真

たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復旧・復興ビフォーアフター映像集」（最終閲覧日2022年2月17日）
<http://togajo.1rides.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E3A79E83838E838E838E838E838E793438B>

みやぎ復興情報ポータルサイト「東日本大震災の概況」（最終閲覧日2022年2月17日）
<https://www.fukukoniyoai.jp/outline/>

「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」パンフレット（最終閲覧日2022年2月17日）
<https://www.city.sendai.jp/kankyo/shisetsu/documents/brochure202004.pdf>

石巻チーム

まず、「見えないものを見る」というテーマで報告したい。1 日目には関係者で入念な準備を行った。何年も続けて来た方々の思いを知り、証人になるとは何かを考える時間となった。2 日目は絵本読み合わせ活動を行い、牡鹿半島、女川、石巻南浜復興祈念公園を訪れた。3 日目には日和山公園や大川小学校を訪れた。

大川小学校では多くのことを考えさせられた。たくさんの人が亡くなり、訴訟 11 年の時を経て訴訟の判決が確定し、震災遺構として残すことも決まった。でもそれで終わりなのだろうか。時計は 15 時 37 分で止まっている。遺族の心の時間はここから進んでいるのか。震災の起こった時間とのずれ。

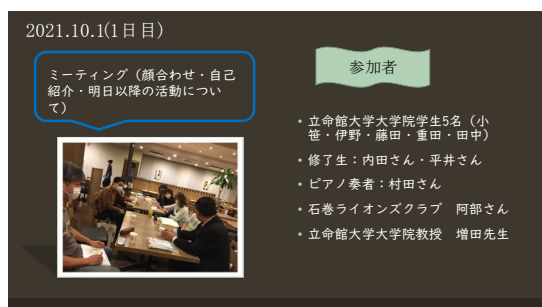
女川に同行頂いた木村正さんは「女川は俺の育った街だ。でも、俺の知っている女川は一つもない。すべてなくなった」とおっしゃった。眼に見える復興とギャップを感じた。木村さんは、「復興した場所で癌合っているのは俺の仲間だ。街はなくなったが仲間たちが復興を続けている」と続けられた。それが誇りとなって木村さんを支えていると感じた。

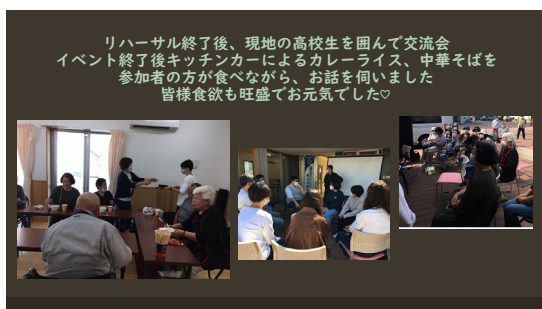
同じく同行頂いた阿部さんは多くを語らずさりげなく支えてくれた。教えるのではなく感じること、知性ではなく感性でを大切にされていた。つなげること、続けること、見えないものに感化されたそんな時間だった。

次に「それぞれの物語」に触れる。イベントを行ったが、会話の合間に「このビルに逃げたのよ」など震災の時の話が語られ

る瞬間があった。一見関係のない話のなかにも震災が顔を出す。それぞれの人生と震災の体験が溶け合って今の自分がいるという印象を受けた。

人々の体験した震災は同じようで違う。震災なしでは自分の人生も今の生活も語ることはできない。だからこそ全く関係ないところからでも震災の記憶につながることもある。人の暮らしは長い時間をかけて引き継がれている。街が発展しても、時間が進んでも、残しておきたいものがある。見えない物語にも、知らない物語にも想いを馳せられるようになりたい。





宮古チーム

宮古では高齢者福祉施設が窓口となっていることもあり、現地に行ったうえで、プロジェクトはリモートで行い、フィールドワークを実施した。

リモートでのプロジェクトは、漫画トークと座談会「宮古震災から十年」を行った。若竹会・スキップの鷺田敦子さんは、被災当時を振り返り、「障害を持っている人がいることを地域の人に知って欲しい」とおっしゃっていた。団士郎漫画展は、10月25日～11月14日、イーストピアみやこ（宮



古市市民交流センター)で開催された。ここは市役所・市民交流センター・保健センターが一体となった施設で、コロナワクチン会場ともなっており、ワクチン接種に訪れた多くの市民が見てくれたそうだ。

その後、三陸鉄道に乗って田老を訪れ、宮古市企画部田老総合事務所所長の斎藤清志さんから、「田老の今・これから」というテーマでお話を聞いた。防潮堤は今後想定される100年に1度の津波は耐えられるが、東日本のような1000年に1度は耐えられない。防潮堤は逃げるまでの時間稼ぎであり、防潮堤があると津波が来ていることがわからないと言うが、わかってからでは遅い。人命を守るために、高台に家を建てる。防潮堤が全て守ってくれれば過信はいけませんが、それでも田老に防潮堤は必要だと思うということだった。2011年の東日本大震災のとき93歳で、二度の津波を乗り越えたというおサヨさんについて書かれた『田老の町で生き抜いて』を頂いた。

最終日は田老の学ぶ防災ツアーに参加した。宮古では、過去にも大きな津波があり、津波とともに生きてきた街だった。1933年、昭和三陸大津波を受け、高さ10mのX型の巨大防潮堤を建設し、津波防災の象徴としてチリ大震災津波では大きな被害がなく住民を守った歴史がある。しかし、東日本大震災では最大16mの津波が到達、万里の長城と言われる防潮堤は破壊された。

学ぶ防災ガイドの佐々木純子さんによれば、宮古では、防潮堤の外側(海側)で1人、内側(陸側)で180人が亡くなった。佐々木さんは、「防潮堤はあくまでも時間稼ぎ」と繰り返し強調され、この町に住むことは、津波とともに暮らすことであり「つなみて

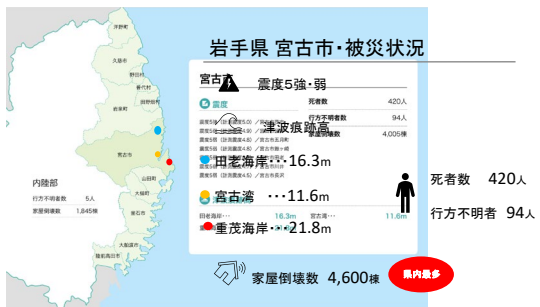
んでんこ」の教えの重要性を語った。たろう観光ホテルで観た映像は言葉も出ない衝撃的なものだった。「避難して笑われても、遅れたら命がない」と言っていた。この日は快晴で海がきれいだったが、防潮堤は巨大なコンクリートの壁だった。

フィールドワークでは、喫茶震災前以前から宮古市の三陸海岸でカフェ異人館を営むマスターにお話を伺ったが、防潮堤が建設される前、店の前には海が広がりとても美しかった。震災では1階はすべて流され、骨組みだけが残ったと1枚の写真を見せてくれた。マスターは「綺麗でしょ。誰かが片付けたんじゃないで全部津波にもってかれた」と言った。被災当時、マスターは消防隊員として水門を締める活動途中で津波にのまれ何度も黒い水を飲んだ。生死を彷徨い何とか一命をとりとめた。防潮堤についてマスターは「三陸海岸で生活すると人生で3回は津波がくる。この防潮堤だって想定されてる津波の高さは越えてくるんだ。だからこんなの作っても意味ない」と語った。マスターは防潮堤建設に反対し、最後まで着工されなかった場所の1つだったという。

午後は遠野の町を訪れた。遠野は沿岸部と内陸各地を結ぶことから東日本大震災では後方支援拠点となり、プロジェクトの初年度は遠野で行われたという。遠野市は山に囲まれた馬と人と民話が生きる土地で、遠野物語には河童や座敷童子が登場する。私たちは大平悦子さんのお宅を訪れ、実際に遠野物語を聴いた。方言、間合いから感じられる遠野物語は非日常な空間を味わい、遠野物語を通して昔の人たちの教訓・想いを受け継ぐ体験となった。

宮古の復興は津波とともに暮らすことを

「伝承」し続けることであり、「証人」になることは震災を「知る」ことから始まると学んだ。



2021.11/5～7@ 宮古

2 day

- 漫画トーク zoom
- 座談会「宮古震災から10年」
- 講和「田老の今・これから」

3 day

- 学ぶ防災ツアー
- 遠野市博物館 見学
- 大平 悦子 様 訪問「遠野物語」



過去にも大きな津波があったこと
津波とともに生きてきた街であること

田老の「万里の長城」

1933年 昭和三陸大津波を受け
X型の巨大防潮堤を建設

津波防災の象徴としてチリ大震災津波では
大きな被害がなく住民を守った。

東日本大震災では 最大16mの津波到達 破壊される

津波でてんでんこ

津波から逃げて助かるために、親・兄弟でも人のことに構わず、てんでんばらんに素早く逃げなさい。



講話「田老の今・これから」

宮古市企画部田老総合事務所
所長・齋藤清志氏



2011年の東日本大震災のとき93歳だったおサヨさんの一生の物語。おサヨさんは二度の津波を乗り越えました。



田老で暮らし、宮古で働く。
田老の人は田老に親しみをもつ。

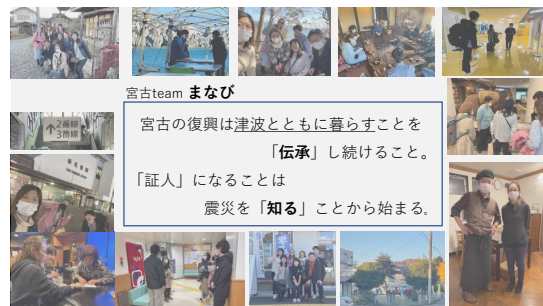
今後想定される100年に1度の津波は耐えられる。
でも、東日本のような1000年に1度は耐えられない。
防潮堤は逃げるまでの時間稼ぎ。
防潮堤があると津波が来ていることがわからないというがわかってからでは遅い。
人命を守るために、高台に家を建てる。
防潮堤が全て守ってくれると過信はいけないが
それでも**田老に防潮堤は必要**



喫茶
「異人館」

宮古では人生の中で3回は津波に会う。

津波は特別なことではない。



福島チーム

福島チームは、1日目、福島市でふくしま連携復興センター「福島の今、そしてこれから」を聞き、「みんなの家@ふくしま&みんなの家セカンド」で交流夕食会に参加した。2日目は、白河市にあるマイタウン白河で、団士郎家族漫画展、「カプラに挑戦しよう」、団士郎の漫画トーク、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムを実施し、EMANON で交流反省会を行った。それからいわき市湯本に異動し、それぞれ夜の街を散策した。3日目は古滝屋のFスタディーツアーに参加し、檜葉町伝言館、富岡駅周辺、夜ノ森駅周辺、久ノ浜沿岸部など視察した後、各自でいわき震災伝承みらい館やいわき駅前散策などを行った。この行程を動画で紹介した。

2011年3月 あれから、もうすぐ11年。
福島は復興していると言えるのだろうか。

震災直後、福島市は「放射線は大丈夫」と聞いていた。ラジオでもそう流れていたしかし、実際は……。 (放射線地図と震災直後いわき市の放射線量グラフ)

男性は言う。「あの時、水を汲みに行く時、子どもを連れて外に出てしまった。体に影響が出るのは数十年後。子どもに何かあったら。ずっと後悔の念を抱いている……」。

そうして、福島の子どもたちは外に出ず過ごすことになる。砂場などの子どもの遊び場が屋内に作られ、公園の利用時間も制限された。

あれから十年、復興は進んだと思っていた。

2021年12月、衝撃の光景を見た。線路を隔てた西側には人の生活があるが、東側には誰も住んでいない。それはたった一本の線で分断されていた。線路の東側には音がなかった。本来なら聞こえてくる子どもの声、家族の笑い声、近所の人たちとの挨拶、すべてがなかった。寄せ書きが余計に寂しさを際立たせた。この地に立った時、自然に涙が流れ出た。その場に立たないとわからない感情に襲われた。

でも、「世界一同情された街」から「世界一感謝にあふれた街」「あこがれの街へ」。そうやって立ち上がった人たちと沢山出会った。

- ・チーム福島 pay it forward (恩送り) 知らない人同士をつなぐ
- ・ビーンズふくしま、みんなの家 福島に避難してきた人、避難して戻って来た人をつなぐ
- ・未来の準備室 EMANON 高校生と福島

をつなぐ

- ・おひさま広場 家族の絆をつなぐ
- ・古滝屋当主 あらゆるサービスを金で買う社会で忘れ去られているものがある。「今、起こっていること」を語り継ぐ

原子炉と大自然の対比は私たちに何を伝えるのだろう。大きな自然の力の前では人は時として無力である。

でも、人の思いと笑顔が分断されたものをつないでいく姿をたくさん見た。その姿に新たな思いが湧いてくる。そして私たちがやることがわかった。証人の1人として、この事実を一人でも多くの方々につないでいく。明日へ……

福島からの学びである。

- ・線を引くことの意味を考えさせられた。帰属意識などを高めるという意味で良い部分もあれば、分断を起こしてしまうこともある。だからこそ、その場所・人とかかわり続けることが大事だということを学んだ。
- ・ふるさとを奪われる理不尽な状況を知り証人として胸を痛めている。誰かの大切な場所を守れるように、自分に出来ることを考え、行動したい。
- ・人と人とが繋がりあうことで地域ができあがっていくということを強く実感できたことがある。震災・復興ということばかりは見えない地域の力や人とのつながりを感じることができた。

・終わらない被災の時間の中で、福島の水や大地が汚されて行くことは、人々の心の世界が壊されて行くことにもつながるのではないだろうか。今だからこそ、そのような状態を生き抜く福島の人々の姿を長く伝

え続け、自分のできる事は何かを問うていきたい。

・10年前に避難していた浪江住民の全く先が見えない喪失感に声をかけられず。そして10年たって子どもたちの未来を奪った原発事故。福島に怒りに何ができるのか。私なりに行動は続けていきたい。

・震災を歴史的事実として伝承し、そしてこれまでと同じように伝承していく人々から多くを学ぶことができた。これからは「証人」のひとりであり続けたいと思う。

・福島で出会った、ひとりひとりの物語。大きな出来事の奥にある小さな声を聴くこと、見ること、思いを巡らせること、関心を持つこと。対人支援で大事なことを学んだ。

・福島で体験したことを、自分のフィールドで伝え、またそこで対話を繰り返していきたいです。原発事故を自分事として捉える人が増え、連帯していければと思います。

福島で暮らすさまざまな物語があった。

・福島から日本を元気にしたい。
・困っている人がいたらできることをするだけ。

・「福島を忘れてほしくない。まだ終わってないんだよ」原発内見学ツアーに参加された饅頭屋さんの言葉。

東日本・家族応援プロジェクトで力をもらったのは私たちの方。一緒に学んだ院生メンバー、11年続けてこられた先生方、出会った方々に感謝する。

「福島を忘れてほしくない

まだ終わってないんだよ」



チーム福島：
小笹、渡邊、大谷、北口、郷間、佐野、前田、河野

ふくしまプロジェクトの概要 (2021年12月3,4,5日)

<1日目>福島市	<2日目>白河市	<3日目>いわき市
各自：BLTカフェで昼食	合同：マイタウン白河	合同：フスタディーツアー
合同：ふくしま連携復興センター「福島の今、そしてこれから」についてお聞きする	① 国士郎の家族漫画展 ② カプラに挑戦しよう ③ 国士郎の漫画トーク ④ クリスマスカレンダーを作ろう	榎葉町伝言館、富岡駅周辺、夜ノ森駅周辺、久ノ浜沿岸部
各自：みんなの家@ふくしま みんなの家セカンド	合同：EMANONで交流反省会	各自：いわき震災伝承みらい館 いわき駅前散策 など
各自：福島の方との交流夕食会	各自：いわき湯本 夜の街 散策	



2011年3月11日

あれから、もうすぐ11年



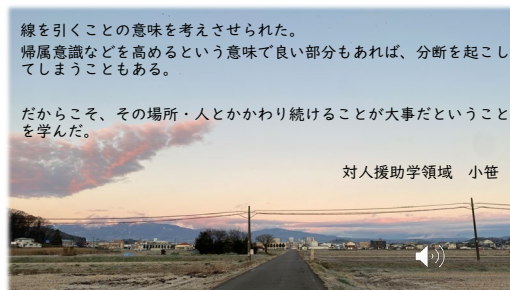
ふくしまからの学び



線を引くことの意味を考えさせられた。
帰属意識などを高めるという意味で良い部分もあれば、分断を起こしてしまうこともある。

だからこそ、その場所・人とかわり続けることが大事だということ
を学んだ。

対人援助学領域 小笹



ふるさとを奪われる理不尽な状況を知り証人として胸を痛めている。
誰かの大切な場所を守れるように、自分に出来ることを考え、行動したい。

臨床心理学領域 渡邊



福島で出会った、ひとりひとりの物語。

大きな出来事の奥にある小さな声を聴くこと、見ること、
思いを巡らせること、関心を持つこと。

対人支援で大事なことを学んだ。

対人援助学領域 前田



人と人が繋がりがあうことで地域ができあがっていくということ
を強く実感できたことがある。

震災・復興ということばかりは見えない地域の力や人とのつながり
を感じることができた。

臨床心理学領域 大谷



福島で体験したことを、自分のフィールドで伝え、またそこで対
話を繰り返していきたいです。

原発事故を自分事として捉える人が増え、連帯していければと思
います

博士後期課程 河野



終わらない被災の時間の中で、福島の水や大地が汚されて行くことは、
人々の心の世界が壊されて行くことにもつながるのではないだろうか。

今だからこそ、そのような状態を生き抜く福島の人々の姿を長く伝え
続け、自分のできる事は何かを問うていきたい。

対人援助学領域 北口



福島で暮らす さまざまな物語



福島から日本を
元気にしたい



困っている人がいたら
できることをするだけ



この地で今後も
商売を続けていく

10年前に避難していた浪江住民の全く先が見えない喪失感に声を
かけられず。
そして10年たって子どもたちの未来を奪った原発事故。
福島人の怒りに何ができるのか。
私なりに行動は続けていきたい。

対人援助学領域 郷間



「福島を忘れてほしくない

まだ終わってないんだよ」

原発内見学ツアーに参加された、
饅頭屋さんの言葉



震災を歴史的事実として『伝承』し、
そしてこれまでも同じように『伝承』
していく人々から多くを学ぶことがで
きた。

これからも『証人』のひとり
であり続けたいと思う。

対人援助学領域 佐野



東日本・家族応援プロジェクトで 力をもらったのは私たちの方



一緒に学んだ院生メンバー
11年続けてこられた先生方、
出会った方々に感謝

各地のみなさまからのメッセージ「来訪者を受け入れて」

お世話になった現地の方々からメッセージを頂いた。

阿部浩さん（ライオンズクラブ国際協会石巻中央ライオンズクラブ会長）からは、11年という長い時間を経て活動して頂いていることに感謝する。大学から来てもらったみなさんが何を見て何を学べるか考えながらサポートさせてもらってきた。災害はどこでも起きるし、我々と背中合わせで抱えているものだが、学んだことを自分事と捉えてふだんの学習に活かして欲しい。他の形でも関わってくれている方々も出てきていて、プロジェクトから横つながりで拡がっている。

中鉢博之さん（NPO 法人ビーンズふくしま 常務理事事務局長）からは、2011年の12月に始まって11年のおつきあいをしてきた。プロジェクトは、現場に入って地域の実情に触れてということをして11年続けてきたことがすごいことである。院生が入れ替わっても、繋がりと積み重ねの上にさきほどの報告にあったような学びがある。実際、仮設住宅に入って子どもや住民と関わったり、冬の寒い時だったが、我々のNPOで借り上げている仮設住宅に宿泊してもらって、一緒に鍋をしたりしたことなど思い出深い。福島は原子力災害が特徴で、まだ終わっていない。まだ帰れない人々もいれば、復興に向けて力強く歩んでいる人もいて一様ではない。プロジェクトが一区切りしても、この縁をつないでいけたらと思う。

大平悦子さん（岩手県遠野市語り部、日本民話の会会員）からは、毎年11月、沿

岸部を訪ねた後、必ず遠野を訪ねて来てくださった。みなさんにお話を聞いてもらったが、意識して遠野物語99話や娘のしゃれこうべなど、震災にまつわる話を聞いて頂いた。みなさんとても熱心に聞いてくださった。東北から見ると東京でも遠いのに、京都というさらにはるかに遠いところから十年にわたって訪ねてくださることをとてもとてもありがたく思い、毎年11月が楽しみだった。プロジェクトが終わっても、折あれば是非遠野に寄ってほしい。

上山眞知子さん（東北大学災害科学国際研究所特任教授）からは、被災地という地名はないが、災害ど真ん中にいて感謝申し上げる。ここからは辛口のコメントになる。日本は世界一リスクの高い地域と国連に認められている。大変だと言うだけでなく、みなさんの暮らす西日本でもいつ何時災害が起こるかわからない。どこか遠い話だと思っているのではないかと発表を聞いていて思った。我が事だともう少し考えてもらいたい。協働とは具体的には何だったのか、東北弁とひとくくりにしない、地元の力、防潮堤のこと、防災はありえず減災しかありえない、福島は人災、国、政治的システムの問題であり、自分たちのことである。すばらしい取り組みではあるが、是非、東北のこととしてだけでなく自分のこととして考えてもらいたい。そうでなければ、こんな体験をして仇討ちができないという気持ちが強い。covid19でも同じことだと思う。自分事として考えていくということを学んでもらいたい。

休憩時間には、院生が作成してくれたムービー「思い出の写真」を流した。

第2部 証人になるとは、いかなることだったのか？

教員たちにとって

第2部の「証人になるとは、いかなることだったのか？」では、最初にプロジェクトを率いて来た教員から話題提供し、プロジェクトに参加したメンバーによるフォトボイスを共有した。

村本の方からは、スタートする時点で目的を「被災と復興の証人になる」とした。長く臨床をするなかで、専門家にできることはごくわずかだが、できることは証人になるということだと学んできた。

現地に入ることに許可を得て、被災と復興のプロセスをほんの少し共有させてもらえたらと考えた。人々と顔の見える関係を結び、それぞれが生きてきた人生の豊かさとともに、被災とその後を生きる今を記憶する。それを自分たちの日常に持ち帰り、地域をつなぐ回路を開くことで、地続きの揺れを経験した同じ大地に生きる者として、復興の物語をつくることに参加したいと考えた。

それで、東北4県を毎年訪れ、受け入れ機関と一緒にコミュニティに向けたプログラムを実施、街を歩き、人々と出会い、土地のものを食べ、同じ空気を吸う。そこで体験したこと、見聞したこと、考えたことを記録し、振り返り、記述し、発信する。被災地への関心を持ち続け、アンテナを張って情報を集め、次の訪問を心待ちにする。ということをやってきた。距離があるから、1年に1度だからこそ見えるものがある。

十年とは、コミットメントの決意と宣言だった。偶然や出会いに開かれる空き容量

が重要である。場に身体を曝すことで、自分の身体に土地の記憶が刻み込まれ、その土地に自分の足跡を残す。当事者性と他者性とは、距離があるから見えるものがあり、繰り返し訪れることで見えなくなっていくものもあることを、初めて行く院生たちから気づく。侵入者によって照射される異質なものと融合、繰り返しが日常をつくり、非日常を日常に含み込む力となる。東北の十年は、私の人生を支える重要な構成部分となり、世界観を変えた。私にとっての証人になるということはそういうことだった。

証人になるとはいかなることだったか？

村本 邦子

被災と復興の証人になる

長くトラウマの臨床に関わってきて、専門家にできることはごく僅かではなく、それでもできることは、証人 (witness) になること

現地に入ることに許可を得て、被災と復興のプロセスをほんの少し共有させてもらえたら。人々と顔の見える関係を結び、それぞれが生きてきた人生の豊かさとともに、被災とその後を生きる今を記憶する。それを自分たちの日常に持ち帰り、地域をつなぐ回路を開く。

地続きの揺れを経験した同じ大地に生きる者として、復興の物語をつくることに参加したい。

同じ時期、同じ場所へ、細く長く十年・・・

①東北4県を毎年訪れ、受け入れ機関と一緒にコミュニティに向けたプログラムを実施、街を歩き、人々と出会い、土地のものを食べ、同じ空気を吸う。
②そこで体験したこと、見聞したこと、考えたことを記録し、振り返り、記述し、発信する。
③被災地への関心を持ち続け、アンテナを張って情報を集め、次の訪問を心待ちにする。

距離があるから、1年に1度だからこそ見えるものがある
(もちろん見えないものはたくさん)

振り返って

- ・十年とは、コミットメントの決意と宣言
- ・偶然や出会いに開かれる空き容量が重要
- ・場に身体を曝すことで、自分の身体に土地の記憶が刻み込まれ、その土地に自分の足跡を残す
- ・当事者性と他者性
- ・侵入者によって照射される異質なものと融合
- ・繰り返し日常をつくり、非日常を日常に含み込む力となる
- ・東北の十年は、私の人生を支える重要な構成部分となり、世界観を変えた



団さんからは、自分にとっては、漫画展と冊子の配布をして、漫画を被災地に伴走させたという感じだった。ここでまず漫画をひとつ見てもらう。現地でも取り上げたことがあるが、ずいぶん前に大阪であった食中毒の時の話。木陰の物語を描き始めて22年、なぜこんなことを続けてきたのかという答えがようやく見えてきたのが、この証人になるというプロジェクトの最終年である11年目だった。

大きな災害物語に対して、それぞれの人たちが前から持っていた小さな物語の回復が力を持つということに気づかされた。大きな事件に上書きされて圧倒されることはありがちだが、それを回復させるのはその人のなかにある物語なのだとクリアにわかった。これは被災地だけのことでなく、今日の日本社会に生きていて、さまざまなことに遭遇し、未来に向けて進んでいかなければならない時に、個別の物語を確かに行うことが重要である。その時、他人の物語が触媒になる。誰かの中にある小さな物語に他者が触れることで、それが共鳴共振して人が未来に向けて進むための力になり得る物語を想起させる。

漫画家であることと家族療法家であることが自分の中で統合された。そういうことをする自分だからこその私の責任がある

と、時間をかけて腑に落ちていったのが私にとっての証人になるということだった。

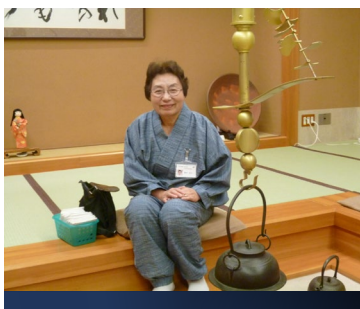
鶴野さんからは、2013年に立命館大学に赴任して、懇親会で大学時代の同級生だった村本との再会があってプロジェクトに参加することになった。子どもの民俗文化を研究しているので、2014年にみやぎ民話の会とつながり、その時の8月に第八回民話の学校に参加し、村本はその時に大平さんと同じ部屋で寝物語を聞いたということだった。そこでたくさんの人々と出会い、人はなぜ歌うのか、物語るのかをあらためて考えるようになった。そのことと証人になるということが関係しているのだと最近考えるようになった。

鷺田清一さんの言葉。「・・・苦しみに埋没し、あっぱあっぱしているじぶんをじぶんから引き剥がし、疎隔化して、だれか別の人のことのように語りだすこと・・・＜語り＞なるものの＜話＞のこうした整えには、だから、他人という立会人、証言者がいる。相づちを打つことで＜語り＞が起動する瞬間を支えるのである。さらにそのためには、＜語り＞が拓かれる場合は、ここでは何を言っても咎められない、撥ねつけられないという安心感に満ちた場であることが求められる」。

東北に出かけて行って話を聞くということとは、このような語りの整えに立ち会うということだったのではないか。どこまで達成できたかとなると不十分だと思うことも当然あるが、自分にとって証人となることとは何かという問いに対して、現時点で感じているひとつの答えであり、こうありたいと思っていることです。

フォトボイス

プロジェクト参加したメンバーの写真と声による11年の振り返りをフォトボイスの形で紹介した。



語り部：
奥寺恭子さん

2011年 11月4日

@岩手県遠野市

(撮影：尾上明代)



① おおぞら保育園 2012年10月5日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世



② 保育士さんたちとグループトーク 2012年10月7日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世



③ クローバー保育園 2012年10月7日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世

④カーナビが示す場所

2011年11月4日 16:32:20

陸前高田市
渡邊佳代



⑤どんな表情で？！

2011年11月4日 16:35:38

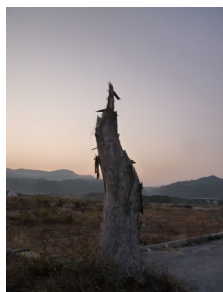
陸前高田市
渡邊佳代



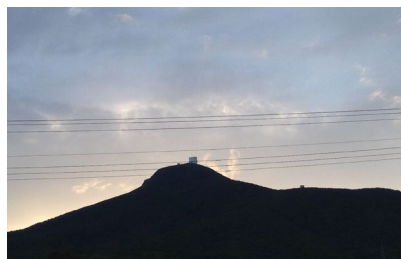
⑥ねじ切れた木

2011年11月4日

陸前高田市
渡邊佳代



2013.9.5 六ヶ所原燃PRセンターにて 洪潤和



2013.9.6 むつ市中央公民館にて 洪潤和



2013.9.6 むつ市中央公民館にて 洪潤和



2022.1.6 石巻ことぶき町通り 石巻市観光ボランティア協会、斎藤さん (宮下薫)

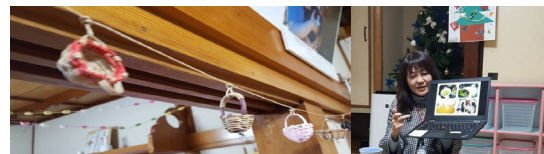
二本松市の朝の風景
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



①2017年12月1日福島



今日の放射線量
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



**ビーンズふくしま
フリースクール**
②2017年12月1日

様々な思いを持ちながらも..
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



③2017年12月3日 福島波江



2016.11.5 石巻市公民館にて 高校3年生の及川さん、お祖母さまと (宮下薫)

道中の津波の痕跡

人間科学研究科修了生 有馬祐美子



多賀城市, 2018年10月5日

災害レジリエンスと古文書レスキュー活動



多賀城市, 2018年10月6日

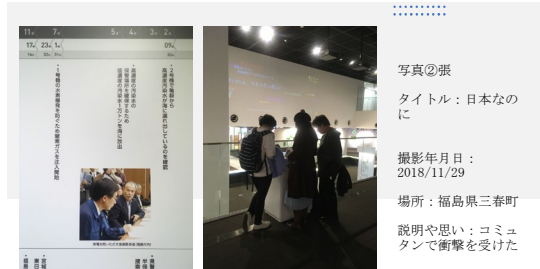
被災者だからこそ伝えられる、期待される支援者像



石巻市, 2018年10月7日



写真①張
タイトル: 未来
撮影年月日:
2018/11/4
場所: 岩手県田老町
説明や思い: ローカル視点からの復興の進捗だ



写真②張
タイトル: 日本なのに
撮影年月日:
2018/11/29
場所: 福島県三春町
説明や思い: コミュニタンで衝撃を受けた



写真1張
タイトル: 当事者が語る震災後の生活
撮影年月日:
2018/11/3
場所: 岩手、宮古市



写真③張
タイトル: 次のタネは撒くべきか
撮影年月日: 2019/12/08
場所: 福島県新築村
説明や思い: 福島が抱えている複雑な状況伝えるべきだ



写真2張
タイトル: 津波の威力
撮影年月日:
2018/11/4
場所: 岩手、宮古市



写真3張
タイトル: 電車の窓から見る岩手の秋
イベント
遠野物語
撮影年月日:
2018/11/2
場所: 岩手、盛岡市

第3部 明日に繋ぐ～それぞれの継承

被災と復興に終わりはない。第三部は院生による進行で、現地の協力者や修了生たちの振り返りと今後に向けた取り組みについて話題提供してもらった。

眞手忍さん（青森県むつ児童相談所こども相談課課長）から。私はむつ児相に赴任してからプロジェクトには6回参加した。むつ市は被害は大きくなかったが、家族支援をコンセプトに、むつ市の支援機関が協働して支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、団士郎漫画展、漫画トークの四

本立てでやってきた。むつ市では、要対協など月1回以上集まりがあるが、どうしても支援者の思いが中心になってしまいがちななかで、支援者支援セミナーは家族主体の支援を考えるというものだった。参加者が家族に興味を持って見るということが支援になるということを学んだ。

子どもの最善の利益を目指して家族主体の支援を地域に根差して続けていくために、市町村に受け継いでもらうために、このような形のセミナーを毎年、児相主催で続けていきたいと考えている。

丸山隆さん（多賀城市教育委員会生涯学習課副主幹）から。このプロジェクトには、多賀城市立図書館の館長をしている時に出会い、最初は漫画や民話がどこにつながっていくのかと少し不思議に思いつつ、「十年間やる」という言葉に感動して、取り組み始めた。仕事上の立場が変わっても関わり続けている。家族応援だが、一人一人への寄り添いプロジェクトだと思っていたが、つながりが深くなり、歳を重ねるにつれて、血がつながってなくても家族になっていくことを感じるようになっていった。多賀城家族とか宮古家族とかむつ家族とか、家族をあちこちで作りながらここまでできた。点と点ではなく線としてつながっていく。「十年やる」と言い切ることのすごさとやり続けたことのすごさを感じ、学ばせてもらった。誰もが、いつ何時にも被災者になり得る。被災したのは一瞬で、その後が大変だが、そこから一歩進めばもう被災者ではないと思う。自分自身は生き証人として歩いていくのだと自分に言い聞かせている。ここまで続けてきたプロジェクトがこれで終わってしまうのは寂しいと思

い、せっかく結びつけてもらったものを、関係者のみなさまと多賀城で新東日本家族応援プロジェクトとして継続させていきたいと思っている。

新谷眞貴子さん（修了生、NPO 法人家族・子育てを応援する会理事長）から。地域で子育て支援をやっているが、このプロジェクトを経験して、つながる、継続、共に、発信というモットーができた。広陵町で生まれ育ち、30年間教員をし、地域の子どもたちのために何かしたいと大学院に入り、このプロジェクトには8年間継続して関わらせてもらい多くを学んだ。2016年3月、団先生に背中を押してもらう形で漫画展・講演会を開催し、そこから私たちの活動がスタートした。

団先生から「続けることやで」と言われ、6年の時を重ねて行政や住民の協力が得られるようになり、参加親子も増えた。コロナの中でも、電話したりお便りを出したり、ZOOMで親子広場をしたりなど工夫を重ねて続けてきた。子育てしやすい町を目指し、町長とのタウンミーティングもやった。人と土地に寄り添い、丁寧につながるということをプロジェクトから学んできた。今ではこれまで参加してくれてきたお母さんが「私たちもお返ししていきたい」と自分たちで活動を始めた。こうして次世代にもつながっていくはず。先日は、地域で家庭や子どもを支える全国31の機関として表彰された。これからも活動を続け、次世代につなげられる体制を確立していきたい。

内田一樹さん（修了生、自由の森学園中学高等学校社会科教諭）から。2015年、

初めてプロジェクトに参加し、増田先生とともに石巻を3回訪れた。大川小学校は教師としての原風景となっている。自分にとって印象に残っているのは、初めて石巻を訪れた翌年、2016年熊本地震が起きた。実家が熊本で被災した。石巻と熊本の風景を見た自分に何ができるかを考えた。その年は石巻には行けなかったが、東京で増田先生のイベントに参加した時に、阿部さんに再会し、黙って抱きしめて頂いたことは忘れられない体験になっている。

政治学者であるジョアン・トロントが言っている「私たちすべてがケアを提供するだけでなく、受け取る者である」という言葉を実感する。石巻で頂いたものをどのようにお返しするかを考えている。自分が社会科教諭であることから、子どもたちが多様な声をどのように自分のこととして聞けるかが課題である。自分の物語と子どもたちの物語をつなげられないか。来年からは自分自身が東日本と関わるプロジェクトを始めたいと考えている。子どもたちにケアする、ケアされるということを学んでもらいたい。これが自分にとっての継承である。

河野暁子さん（人間科学研究科 D3、岩手県立大学宮古短期大学部准教授）から。関東出身で、当時、原発事故に大きな衝撃を受けた。自分たちの使っている電力がどこで作られているのかをそれまで知らなかった。最初は所属機関から岩手県に入り、所属を何度か変えながら岩手に暮らしている。初めは「心のケアをするぞ」と思っていたが、だんだん土地の人々の持つ力に眼が開かれていった。村本先生とは20年前から知り合いで、東北でも何度か会ってき

たが、2018年に大学院博士課程に入り、プロジェクトに参加するようになった。

そこで学んだことは、災厄を生きる人たちとの出会い、土地の歴史・風土・文化の重みや力強さ、回復・収束へ向かう大きな物語があり、そこから取りこぼされているひとりひとりの小さな物語があるということ。誰もが安心して暮らせるのはどういうことだろうというのを考え続けてきた。これは自分の人生のテーマにもなった。こういったテーマを持ちながら多くの人と対話を続けたい。教員として、最近、当時小学生だった人たちと話す機会があり、今後は震災の時に生まれていなかった人たちも増えていくだろう。そういう人たちとも対話を続けながら考えていきたいと考えている。

村本から。11年でプロジェクトは一区切りとなるが、まだとても区切れないのが福島で、何らかの形で活動が続けていきたいと考えている。双葉出身の目黒とみ子さん（東日本大震災時は双葉町民、現在茨城在住/みやぎ民話の会）に双葉の状況をお聞きしたいが、今日の都合が悪いので動画の形で紹介する。目黒さんとは、2014年に民話の学校で始めて出会い、たくさんのことを教えて頂いている。目黒さんは、これからを担っている双葉の子どもたちのことを知って欲しいということだった。福島の子どもたちは全国に散らばっている。子どもたちと関わり、今後も関わっていくかもしれない大学院生に知って欲しいとのことだった。

目黒さんから。震災の時に双葉町は全町避難となり、子どもたちは親の後をついていくことしかできなかった。あの時の子ど

もたちの気持ちを聞いて欲しい。「小学6年生、僕の夢は競輪選手になってオリンピックに出ること。夢をかなえるために、今、陸上で体を鍛え勉強も頑張っています。今やらなければならないことをきちんとやり、努力していきたい。」「中学3年生、現在の自分とこれからの願い。震災が起きて3年4ヶ月。この4年間にたくさんの経験をしてきた。あちこちに避難を繰り返し転校した。最初は人とうまく話せず辛かったけど、サッカーを通じて友達もできた。中学では人間関係でうまくいかず学校に行けなくなった。

高校に行きたいから、中3から双葉中学校に通う決心をした。陸上大会では悔しい思いをしたが、向上心も高まった。一人だけの教室は心細い時もあるけれど、今は目標に向かって頑張りたい。」双葉町では小中一貫校を作ったが、そこに行ったのは彼一人だった。

「高校3年生、約束の日。郡山工業高校で高校野球を闘っていた。序盤から思うようにいかず敗れ、悔しさでうつむきながら球場を出ると、大勢の人が拍手で出迎えてくれた。そのなかに避難先に学生ボランティアで来ていた彼がいた。自分も野球をしていた、高校でも野球やれよ、必ず応援に行くからと見送ってくれた。その約束の日だった。いいところを見せられなくてと言うと、頑張ったじゃないか、また大きくなったなと肩を抱いてくれた。

こうして自分を思い続けてくれた人や支えてくれた人がいたことにあらためて気づき、感謝でいっぱいです。まもなく進路を決める時期がくる。故郷の復興に役立ちたいと工業高校に進学したが、地元に戻る展望はない。進路が決まって落ち着いた

ら、今度は僕が彼を訪ねたい。」みなさん、遠く離れていますが、双葉の子どもたちにもどうぞ思いを寄せてください。

村本より、福島にはまだまだ聴かなければならないこのような小さな物語がたくさんあると思う。もちろん他の地域にもまだまだたくさんあるはず。プロジェクトを一区切りしても、また別の形で今後も小さな物語に耳を傾けることを続けていきたい。現地でも、修了生たちも、それぞれの形でつないでいってくれる。私も細々ながら継続しつつ、できれば、こういう形で年に1回、ZOOMで関係者をつなげたらと考えている。コロナは大変だったが、コロナがもたらしてくれたものでもある。

加藤恵子さん（みやぎ民話の会）から。十年を振り返りながら、ありがたい気持ちでいっぱいだった。なぜ民話と震災なのかと思ったみなさんもいたと思うが、実は私自身がそうだった。それを教えてくれたのがみやぎ民話の会の小野和子さんと、目黒さんとの出会いもそこだった。

目黒さんが何も持ち出せなかったが、唯一持っていたのが胸の中にあった小太郎狐の民話だったという。初めて会った時にも学校に行かなくなった女の子の話を聞かせてくれた。ずっと子どもたちのことを心配して紹介してくださっている。

録画をした日は、仙台で「ゆうわ座」という民話のイベントがあった日で、村本先生も参加してくれた。その時聞いた目黒さんの話は、伝承館での語りとは違っていた。先ほど張さんも言っていたが、伝承館では語れる内容が限定されていて、原発の爆発の話などは、こういう小さな会でしか語れないことがあるんだなと思いながら聞

いていた。だからこそ小さい会が大事なんだと思った。自分も大変な経験をしているのに、自分を語らずに子どもたちのことを心配している。続けること、語り続けること、聞き続けること以外に防災さいとか減殺などない。それが一番大事なのだと今日はあらためて感じた。これからもみんなで頑張っていきましょう。

荒木穂積先生（立命館大学元プロジェクトメンバー）より。ご苦労さまでした。私は二本松でプロジェクトをしていたが、受け入れが難しくなり、定年退職で打ち切りになった。二本松は放射能の汚染地域であると同時に浪江町の受け入れ先でもあった。二本松の市役所が浪江町の役場を受け入れていて、ふたつの自治体の人たちとおつきあいをした。浪江町の人が言っていたが、期間困難地域がある限り、我々の復興の入り口にも到達していない。それは今も変わっていないと思う。村本先生が規模を小さくしても福島プロジェクトを続けていきたいと聞いて、心強く思った。できればまた自分も行きたいと思うし、みなさんにも関心を持ち続けて欲しい。

杉浦裕子さん（元むつ市児童相談所）より。11年間ありがとうございました。実害はほとんどなかったむつで、団先生にメールしたのがきっかけで、私の思惑とは違うところでこんなことに発展して感謝している。去年退職した。当初の目的は、かつて児童相談所に配属されて、何をやればいいのか真暗な時、団先生の本に出会い、ワークショップに通い、たくさん抱えた家族に出会い、団先生の漫画に触れてもらえたら何かヒントになるのではないかと

と思っただけだった。家族というだけでなく、そういう家族に手を差し伸べる地域の力も大事だと思って支援者支援をお願いした。官民の垣根を超えて、児童や高齢者とか障害者とか垣根を超えてひとつの家庭について考えることで協働が続いてきた。これで終わりにしたくないと思っていたら、後任の真手さんが「これから児相でやります」と言ってくれた。大きなお荷物だけれど、大きな財産なので大事にしてください。

上山真知子先生（東北大学）より、いろいろ思い出すことが多い。村本先生と出あって、すごいパワーで「十年通いたい」と言われて断れなかった。あの頃、学会では、「自分たちがどれだけ頑張ってきたか、大変だったか」ばかり、こころのケアばかりで、大きな不満だった。なぜ一夜で被災したみんなが病人にされなければならないのかと。そういう思いに呼応するように村本先生が現れた。

今は、東北大学で文化遺産のことをやっている。ユネスコの関係団体でローマに本拠地のあるイクロム文化遺産研究所の人たちと世界中の文化が持っている宝を大事にしようと、ハンドブック作成などの仕事をしている。地元が持っている小さな遺産、大事な宝、これを救援することになっている。地元の文化遺産こそ被災地復旧と復興を支える。

民話の会には参加できていないが、立命館大学チームの資源、地域の力を活用することには、ただただ感嘆する。先ほど辛口のことを言ったが、まずは地元の力を見えるようになってほしい。

災害直後、仮設の避難場で子どもの遊び

場を作った。子どもが元気になったら大人も元気になる。そんな場面がいくつかあった。振り返ると、やはりレジリエンスが発動した。涙なしに語れるにはずいぶん時間がかかったと思った。今日は一日みなさんの話を聞きながら、ようやく一枚の絵のように捉えられるようになった。つくづく流れて来た歳月の力、これが今後生きて行く力になっていくだろう。若い人たちには、是非忘れないで欲しい。必ず大きな力になっていくから。

最後に村本より、「初めに万華鏡のようと言ったが、少しずつみなさんの小さな声が重なり合って、本当に万華鏡のように見えた。みなさんにはそれぞれ、どんな美しい模様が見えたでしょうか。11年、あっという間のようでいて、実は長い。動画を見ながら、始めた頃は何て若かったのかとも思いました。今後もそれぞれがそれぞれの場所で、このプロジェクトから受け取ったものを続けてくれること、今後もこのような形で結集して繋がり続ける場を開いていきたいと思いました」と締めた。終了後、時間の許す人たちで、ブレイクアウトルームに分かれて交流会を持った。

つづ